

Title	セシリー・マクワース「若きマラルメ」(1)(翻訳)
Sub Title	« The Young Mallarmé » de Cecily Mackworth (1) : traduction
Author	原山, 重信(Harayama, Shigenobu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.42 (2006. 3) ,p.127- 135
JaLC DOI	
Abstract	本論はCecily Mackworth, English Interludes, London and Boston, Routledge& Kegan Paul, 1974の第2章The Young Mallarméのうち、The FrenchQuarter という表題の小見出しのついた箇所全訳である。私としては、この論文の翻訳を、小見出しと紙幅の許す範囲の長さなどに配慮しながら連載していきたいと考えている。何故この文献を紹介しようという考えに至ったのか？それはこの文献が菅野昭正著『マラルメ』（中央公論社、1985年）には部分的に紹介されているものの、多くのマラルメ研究者が引用する論文ではないし、最近上梓されたジャン＝リュック・ステンメッツ著『マラルメ伝』（柏倉康夫・永倉千夏子・宮寄克裕訳、筑摩書房、2004年）にも触れられていない一方、マラルメにとって要の問題の一つである、詩人と英国との関係を考える上で有効な詳細情報を提供してくれるものであり、しかも英語で書かれていることもあって、多くの日本人マラルメ研究者に知られていないという事情による。したがって、読者として想定しているのは、日本人のマラルメないしその周辺に関心のある方々である。そもそも研究者への利便を考えた時、フランス語以外の文献の翻訳紹介は、研究のレベルアップに貢献する意味が大きいように思われる。中世文学や言語学関係の研究者以外にはほとんど顧みられることがないドイツ語文献などはその最たるものであるが、英語文献の翻訳もそれなりに意味があるだろう。この論文は、イギリスの母国人でないと困難である地理的、文化的側面を明らかにしてくれるという意味で注目に値する。ここでは若きマラルメが後に夫人となる女性と駆け落ちして滞在したロンドンの地域の詳細が明らかにされる。このこと自体はマラルメ研究に根本的修正を迫るものではないが、マラルメとイギリスの関係の根深さを証してくれるものであり、これはやがて職業人としては英語教師でもあった詩人がものしたエドガー・アラン・ポーの翻訳をはじめ、『古代の神々』、英語の教科書の類、さらに英国人たちと

	の交友関係を考える際、有益な情報ともなってくれるだろう。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20060331-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

セシリー・マクワース

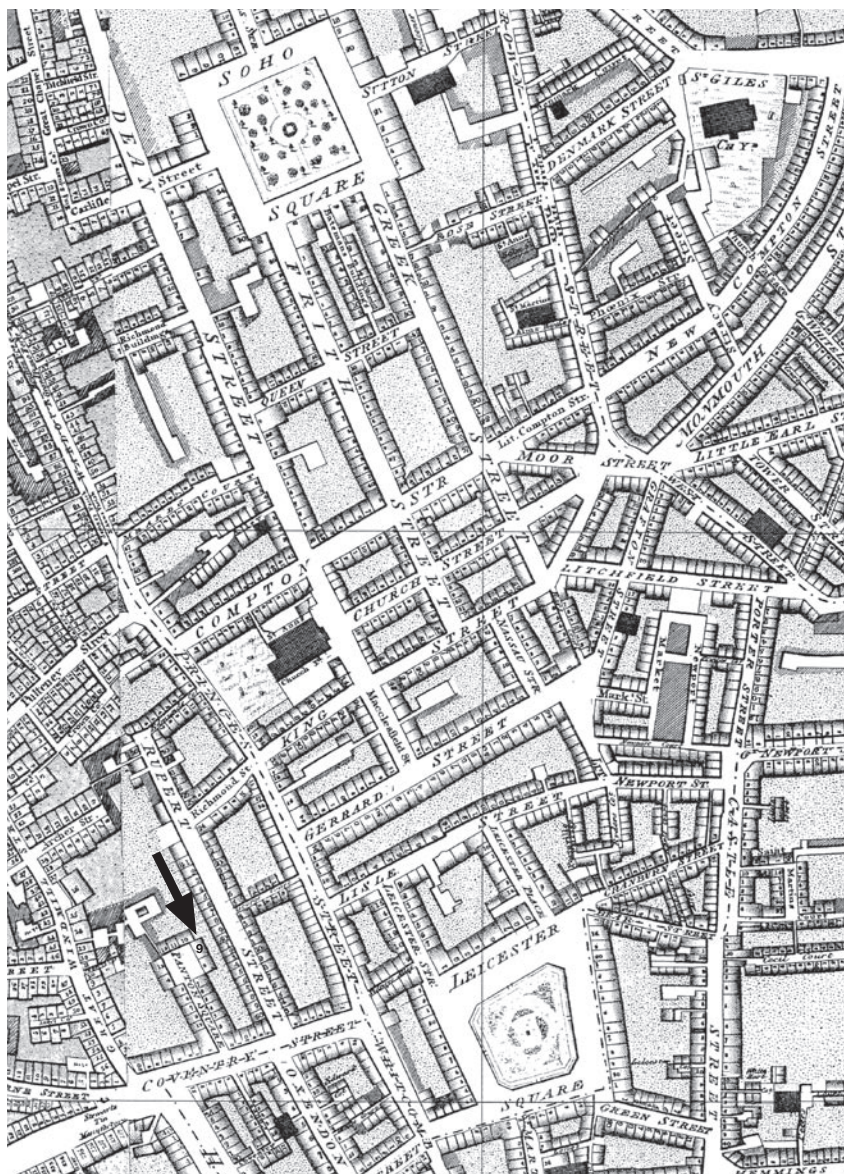
「若きマラルメ」(1) (翻訳)

原 山 重 信

フランス人街

19 世紀中葉のソーホーがこのように奇妙にロンドンの他の地域から遠く離れたままであったのは、一つにはフランスとイギリスとの間の相互的不信、またさらに嫌悪の念によるのであったに違いない。それは、自身の習慣を守り、自身の人生を生きる外国人街であって、同時代人の言うには、イギリス人があまり立ち入らないので、もし一人のイギリス人がソーホー・スクウェア周辺の裏通りの小さなレストランの一つにたまたま迷い込んだりなどしたら、驚きで頭が一斉に上げられただろう。多くのイタリア人、ドイツ人移民が、主として料理人、ウェイターとして働くために、世紀半ば頃にそこに到着しており、ギリシア人、ハンガリー人、実質上全てのヨーロッパ諸国の代表が、かつては貴族階級の住居だった陰鬱な家屋に一緒に群がっていた。しかし、最も大きく最も安定したコミュニティーを形成していたのはフランス人で、ワイズマン枢機卿^{a)}が、ロンドンのフランス・カトリック信者を集めるために教会の用地を探していた際、彼はそれをソーホー¹⁾に選ぶのが当然だと考えた。

ロンドンの「フランス人街」としての、このソーホーの伝統は、少なくとも 14 世紀に遡り、1739 年までに、或る年代記者が、サン・マルタンとサン・タンヌの教区について、「これらの〈教区〉の多くの〈部分〉は、大いにフランス人に溢れているので、〈よそ者〉にとっては自分がフランスにいると想像するのは簡単な〈こと〉だ」と書いているのが見える。少なくとも 800 人のフランス人が近隣に家を買ったり、自分で建てたりしたと、彼は付



ソーホー、パントン・スクウェア界限 (1799年)

出典：『2500分の1 ロンドン検索大地図 1792-1897』 柏書房、1993年。

け加えている。

これらの初期居住者たちの大部分はユグノーの亡命者で、彼らの子孫の多くは19世紀になってもまだこの地域に暮らしていた。しかしながら、1860年代までに、他の移民たちに少々圧倒され、彼ら自身の国内〔フランス〕で動乱と革命の連続する波によって、対岸の英国の地へと押しやられたのだった。その新着者たちは一般に共和主義者で、彼らにとってナポレオン3世は、これらの集団の中ではいろいろな厳しい渾名で知られ、不倶戴天の敵であった。彼らは怒りに満ちた書簡を『ザ・タイムズ』に書くことになり、短命の新聞や半秘密結社を設立しては、いつも激しい内輪の争いの後、すぐに解体していた。彼らはイギリスを嫌っていた。彼らはイギリスを自分達の眼よりはむしろルドリュ＝ロラン^{b)}の眼を通して見る傾向があり、共感を得ようという努力はあまりしなかった。

時が経つにつれて、ソーホーのフランス人の中には自分自身の店を立ち上げる者もいた。これらの店のうち、繁盛してロンドン子たちによく知られていたのは僅かであり、そのほとんどはただ同胞にだけ料理を出す質素な小さい場所だった。フランスの食料雑貨類が買える多数の店、「男女教師の配置のための」事務所、そして本国のカフェの真似をしようとしているフランス人のコーヒー・ハウスがあったが、これらの店は、〈主日遵守〉の諸法に憤慨しつつ従っていた。定食が「フランス料理とフランス語会話の愛好者たちに、比較的手頃な値段で、満足の機会をもたらしてくれるフレンチ・ハウス」として自己宣伝しているホテル・レストラン〈ラ・サブロニエール〉が、僅かの英国人が出入りするこの種の唯一の店だった。この店は、世論を嘲笑して楽しむラファエル前派^{c)}の人たちによって発見され、ロセッティ^{d)}とスウィンバーン^{e)}が「リジーの死²⁾」の運命の夜、そこで食事をした。

自分自身の商売を築き上げていた商人たちが、ソーホーの社会階級の最上位にいた。さらにまた、無数の語学教師、女性家庭教師、小さな婦人服の仕立て屋、料理人、俳優、音楽教師、それに「歌手」がいた。彼らの多くは永続的に安アパートに住んでおり、最も貧しい人たちは「フランス共済会」から援助を受けていた。この団体は大使フラオ伯爵の後援のもと、チュイル

リー宮⁷⁾との人の行き来がたくさんあるナイツブリッジ⁸⁾周辺の上品な地域で華麗なチャリティー舞踏会を催した。

したがって、幾つかのソーホーの裏通りは、みんなが他の誰とも知り合いで、夫たちがカフェでマニラ〔ある種のトランプゲーム〕の果てしないゲームをしている間に、主婦たちが長いパンとワインの瓶を掴んで舗道を急いで行く、小さなフランスの町や、多分どこか北の地方の中心都市の裏通りに妙に似ていた。それは、アングロ・サクソンの習慣に対して僅かな譲歩をせざるを得ないのを苦々しく思う、内向きで好奇心のない生活であり、実際、ヘンリー・ジェイムズ⁹⁾のロンドンに関する評言は、異なった、全く正反対の文脈で、その国外追放者たちによって再現されたフランスのこの小さな街角にほとんど当てはまるものだったのかもしれない。

パントン・スクウェア³⁾は、コヴェントリー通りをちょうどはずれたところに位置し、一方ではウィンドミル通りに境を接し、もう一方はルーパート通りに隣接している。それは当時、その街区が見せる奇妙な対照を象徴するものであった。ほんの数歩出ると、レスター・スクウェアの喧騒があり、そのいかがわしい快楽の巣窟、その不法なボクシングの試合と共に、「魂が壊される悪徳の深淵⁴⁾」だとして、ロンドン最悪の地点の一つだという評判をそれに与える異常な有象無象がいる。その結果、フランス・プロテスタントたちの一グループは「レスター・スクウェア・フランス人風紀保護協会」を組織することが必要だと考えた。

ここでは、毎晩夕闇が迫ると、売春婦、ヒモ、プロボクシングの客引き、子供たちの賭い屋と疑わしい処女、「女装」したゲイ、乞食と詐欺師、ウェスト・エンドから押しのけられたオペラハットをかぶった名士の大群がそっくりやって来て、〈王子通り〉の〈ケイト・ハミルトンズ〉や、〈ポートランド・ルームズ〉で、高くつく女たちの中から気に入ったものを選ぶ。キャバレーは公然と「ベッド」を宣伝していた。この〈辻広場^{スクウェア}〉の無料給食施設が、飢えに苦しむやせ衰えた人を、警察が自ら危険を冒して立ち入るのを拒む恐ろしい路地から招き寄せた。

フランス人はこの〈辻広場^{スクウェア}〉では非常に多くて目立ったが、彼らは裏通り

の穏やかで上品な市民ではなかった。1840 年まで、〈外国人局〉は、外国人が入国するのを厳しく制限していたが、20 年後、ヨーロッパからの移民の殺到によって多かれ少なかれ窮地に陥ったのだった。多忙を極める役人たちは、今度は、新着者に旅行の理由を尋ね、証明書を手渡して再び乗船する際に〈税関局〉にこれを返すように言うだけで満足するしかなかった。このように、〈軍〉からの脱走兵、船のない水夫、処罰からの逃亡者、「フランス女」によって示される、並外れた才能の伝説から利益を得ようと、英仏海峡を越えて船で送られてくる売春婦（これは繁盛する商売で、いかなる法律上の抑制も効かなかった）、働かずに財を築こうと夢見る苦々しい気持ちにさせる無能者からなる、沸きかえり、絶えず変動する人々、即ち、人目につくだけに悪徳は外国からの輸入品だという慰めの信念を確認する、惨めな、浮動する人々が、この〈^{スクウェア}辻広場〉に漂流して来るのだった。

その^{スクウェア}辻広場から僅かはずれたところに広がっているウィンドミル通りとは言えば、そこは全てのうちで最悪の地点だった。ここには〈ローランツ・ダンシング・アカデミー〉があり、もっと安い類の売春婦が闊歩していた。悪名高い〈アーガイル・ルームズ〉があり、町で最もむさくるしくて危険な居酒屋の一つとして有名な〈ブラック・ブル〔黒い牡牛〕〉もあった。ルーパート通りは少しましだった。だからレスター・スクウェアのこれら二つの騒然とした支道の間に押し込められたパントン・スクウェアに踏み入ることは奇妙な印象を与えたに相違ない。しかしパントン・スクウェア自体はロンドンに見られるどんな場所とも同じように平穏で、まともだった。一方の側には、かなり生気のない木が植えられた小さな庭があり、大抵の狭い、黒ずんだ家々は家具を備えた部屋を賃貸しており、そこには主にフランス人の家族が住んでいた。完全にフランスというわけでもなく、イギリスというわけでもない漠然とした国境地帯の、どこか静かな田舎の地点に自分がいるかのように多分思ったかもしれない。

たいそう若い男女が、1862 年 11 月 8 日の晩、到着したのはここだった。当時、そしてその後も長く、旅行客を英仏海峡の向うに運んでいた、二つの船体をつなげた風変わりな種類の船に乗り、ブッローニュⁱ⁾からの恐ろしく

つらい渡航の後で、彼らは疲れ切っていた。その若い男は小柄でとても痩せており、濃いウェーブがかかって黒ずんだ髪をしていて、目は大きくて黒く、大きな長くてとがった独特なサチュロス¹⁾のような耳をしていて、まだほとんど少年のようであった。彼は、自分より少し年上の、ほっそりした金髪の女を伴っていたが、彼女は妙に広い口を固く閉ざし、これが苦勞、或いは頑固さ、極度の慎みを暗示していた。彼らの9番地の部屋は、ウィリアム・グリーン氏所有の家であり、マラルメ夫妻の名で借りられ、向こう2箇月間そと散歩に出たり、開いた窓から注視したりするのが時たま観察され得た。自分たちの殻に閉じこもって、近隣の人たちと付き合いもなく、友人も作らなかったようである。ほとんど全く英語が話せず、同国人〔フランス人〕たちを避ける彼らなりのわけがあった。静かで、きちんとして、引っ込みがちで、誰かの注意を引くようなことは何もしなかった。

何年も後に、彼が自身の私生活に関することを公表するのを許したただ一回の機会に、ステファヌ・マラルメは、友人のヴェルレーヌに手紙を書いた。「ただ単にポーを読むために英語を学んで、私は20歳の時に、イギリスへ向けて出発しました。主として逃れるためでしたが、言葉を話すのを学んで、どこか静かな所で教えるためでもありました。結婚していましたし、これは緊急問題になっていました⁵⁾」。

事は全くそれほど簡単ではなかった。彼と同行した若い女性は、実は彼の妻ではなく（そして彼らが、家主が「結婚証明書」を見せるよう迫りそうもない地区を選んだのは、恐らくこのためだった）、マラルメがロンドンに滞在した年の間に、いくらか英語を本当に学んだにせよ、この時期は、彼にとって、ヴェルレーヌに認めたよりもずっと劇的な意味をもっていた。この異郷生活の月日の間に経験した精神的危機は、実は、派手で、騒がしいランボーが、10年後に経験することになる危機と全く同様に深刻なものだったのであり、それが〔詩篇〕「窓」において最高潮に達した時、その詩は、ランボーの『イリュミナシオン』の要素を創り出したものと同じくらい激しい精神の爆発を表した。しかし、これほど正反対の二つの性質のものも存在し得なかっただろう。マラルメは、ひたすら鋭敏で思慮深く、ランボー・ヴェルレーヌ

の二人の「乱痴気騒ぎの悲惨⁶⁾」へと引きずられることは決してあり得なかった。彼自身の悲劇は、隠された、避けられないほど孤独で、無言のものになった。その唯一の目撃者は、彼の脇で生活する、〔彼の内面の〕実情を解しない女性だったのであり、彼がほとんど毎日の手紙の中で自らの悲惨を打ち明けるたった一人の不在の友だったのだから。

訳者後記

本論は Cecily Mackworth, *English Interludes*, London and Boston, Routledge & Kegan Paul, 1974 の 第 2 章 The Young Mallarmé の う ち、The French Quarter という表題の小見出しのついた箇所⁷⁾の全訳である。私としては、この論文の翻訳を、小見出しと紙幅の許す範囲の長さ⁸⁾とに配慮しながら連載していきたいと考えている。

何故この文献を紹介しようという考えに至ったのか？ それはこの文献が菅野昭正著『マラルメ』(中央公論社、1985 年)には部分的に紹介されているものの、多くのマラルメ研究者が引用する論文ではないし、最近上梓されたジャン＝リュック・ステンメッツ著『マラルメ伝』(柏倉康夫・永倉千夏子・宮崎克裕訳、筑摩書房、2004 年)にも触れられていない一方、マラルメにとって要の問題の一つである、詩人と英国との関係を考える上で有効な詳細情報を提供してくれるものであり、しかも英語で書かれていることもあって、多くの日本人マラルメ研究者に知られていないという事情による。したがって、読者として想定しているのは、日本人のマラルメないしその周辺に関心のある方々である。

そもそも研究者への利便を考えた時、フランス語以外の文献の翻訳紹介は、研究のレベルアップに貢献する意味が大きいように思われる。中世文学や言語学関係の研究者以外にはほとんど顧みられないことがないドイツ語文献などはその最たるものであるが、英語文献の翻訳もそれなりに意味があるだろう。

この論文は、イギリスの母国人でないと困難である地理的、文化的側面を明らかにしてくれるという意味で注目に値する。ここでは若きマラルメが後に夫人となる女性と駆け落ちして滞在したロンドンの地域の詳細が明らか

にされる。このこと自体はマラルメ研究に根本的修正を迫るものではないが、マラルメとイギリスの関係の根深さを証してくれるものであり、これはやがて職業人としては英語教師でもあった詩人がものしたエドガー・アラン・ポーの翻訳をはじめ、『古代の神々』、英語の教科書の類、さらに英国人たちとの交友関係を考える際、有益な情報ともなってくれるだろう。

凡例

原文の表記は、訳文の中で以下のように使い分けた。

1. イタリアック：普通名詞は傍点強調。出版物は『』に差し替えた。
2. 大文字で始まる語：普通名詞、及び店名などは〈 〉で括った。地名は日本語に置き換えたもの以外は〈 〉を外してカタカナで記した。
3. ‘ ’：「 」で括った。
4. [] は原文にはない訳者による補い。

註（数字は原註、アルファベットは訳註）

- 1) ノートル・ダム・ド・フランスが、バーフォードの有名な景観の場所である、レスター広場に建てられ、1868年に奉獻された。
 - 2) Elizabeth Siddal. Dante Gabriel Rossetti の妻が、1862年2月10日にアヘンチンキの飲みすぎで死んだ。
 - 3) 現在はもう存在しない街区。
 - 4) 教会で販売されている R.P. ラーブのパンフレット「フランスのノートルダム」を見よ。
 - 5) 「自叙伝」。「呪われた詩人たち」と題される連載に発表するために、ヴェルレーヌの求めに応じて1885年に書かれた伝記的書簡。
 - 6) 「小さな円形肖像と全身像いくつか」の中の「アルチュール・ランボー」。
-
- a) ワイズマン枢機卿（1802～1865）スペイン生まれのアイランドのカトリック枢機卿。ウェストミンスター大主教。
 - b) ルドリュ＝ロラン（1807～1874）フランスの政治家。ナポレオン3世に反抗。1849年ロンドンへ逃亡。ヨーロッパ民主委員会を設立。1871年帰国。
 - c) ラファエル前派 1848年に英国の画家 W. H. Hunt、Millais、D.G.Rossetti などが“truth, sincerity, earnestnessに帰れ”と叫んで Raphael 以前におけるイタリアの写実画風を尊重して起こした画派。
 - d) ロセッティ Gabriel Charles Dante Rossetti（1828～82）ロセッティ（Christina Georgina Rossetti（1830～94）英国の叙情詩人・画家）の兄。

ラファエル前派の主導者。

- e) スウィンバーン Algernon Charles Swinburne (1837 ~ 1909) 英国の詩人・批評家。
- f) チュイルリー宮 パリのセヌ川右岸にあった旧王宮。1564 年創建以来数回増築。革命時代には幾多の大事件の舞台になった。1871 年コミューンの騒乱期に焼かれたが、庭園は公園として現存。
- g) ナイツブリッジ ロンドンの West End にある高級ショッピング街。
- h) ヘンリー・ジェイムズ (1843 ~ 1916) 米国の小説家で晩年英国に帰化した。
- i) ブウローニュ 英仏海峡に面した Boulogne-Sur-Mer を指す。英国への船は、ここから出発していた。
- j) サチュロス【ギリシア神話】酒神バックスに従う半人半獣の怪物で、酒と女が大好きな山野の精、ローマの faun に当たる。そこから、「好色家」の意にもなる。